

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：33939

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12304

研究課題名(和文) 家族の再構築を促す育児期支援プランの検討

研究課題名(英文) Consideration of support plans that encourage family reconstruction in the child-rearing stage

研究代表者

清水 嘉子 (Shimizu, Yoshiko)

名古屋学芸大学・看護学部・教授

研究者番号：80295550

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：父親の子育て関与を促進または阻害する調整者としての母親の存在に注目し、育児期に互いが協力して子育てに取り組み、子どもを含めた家族の再構築を促すための育児支援プランの検討と、プランで活用する冊子を作成するための尺度の開発を目指した。夫婦ペアレンティング調整尺度を用いて2歳から5歳までの子どもの育児期にある夫婦を対象とした3つの研究を実施した【研究1・3】選択的開放並びに記述式質問項目による自記式質問紙調査【研究2】家庭訪問による個別インタビュー調査。夫婦の調整行動の実態と関連要因を明らかにすることにより、子育て期にある夫婦の調整行動への介入への示唆と夫婦の協力への支援を探求した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

サポート者である父親に着目し、母親にのみ介入するのではなく、母親と父親の両者に介入することで、出産後の危機を乗り越え、家族の再構築を促すことが期待できる。父親は母親の良きサポート者としての存在であることを自ら自覚しながら、コペアレンティングの視点から、夫婦で互いを理解し助け合うことにより、お互いに影響しながら、親としての役割をどのように一緒に行っていくかを追求し、よりよい子育てを可能とすることが期待できる。育児期を夫婦で作り上げ、子どもを含めた夫婦の関係性について見直すことにより、お互いが親としての自信を持ち、人としての成長を遂げると共に、子どもの生育環境に良い影響をもたらすことが期待される。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the mother's tendency to offer encouragement or criticism of the father's involvement in child-rearing, we aimed to examine support plans in child-rearing that encourage parents in the child-rearing stage to work together in raising their children and reconstruct family relationships including children, and to develop a scale for creating a booklet to be used in support plans. We conducted three studies using the coparenting scale ("Coparental Regulation Inventory") in couples who were raising children aged 2-5 years: Studies 1 and 3 were based on self-administered questionnaire surveys consisting of close-ended and open-ended questions, and Study 2 was based on a personal interview survey involving home visits.

By clarifying the current status and related factors of adjustment behaviors in married couples, we suggested interventions for married couples in the child-rearing stage to make adjustments and explored support that could be offered to couples working together.

研究分野：母性看護学・助産学

キーワード：育児期 夫婦 ペアレンティング 促進 プラン 検討 尺度 開発

1. 研究開始当初の背景

夫婦の育児の協力は海外ではコペアレンティング(Copearenting)として着目され様々な研究がなされてきた。コペアレンティングは「(離婚後の)共同養育、共同子育て」と訳される。北米でこの言葉が使われる時には、「月水金は父の家で火木土は母の家、誕生日は年交代、子どもにかかる費用はすべて半分ずつ、あるいは収入比にあわせて父母が負担する」など、父母が養育を物理的に半分ずつ負担し、積極的に父母双方が子どもの養育を離婚後も行うことを指す。と同様に、コペアレンティングとは「夫婦関係を基盤に母親と父親が互いに子育てを支え、子どもに安定した生育環境を提供するために協力し合うこと」、つまり子育てを母親だけに任せるのではなく、父親も一緒に参加して夫婦で協力し合って子育てを行うこと、という意味もある。両親が親としての役割をどのように一緒に行うのかということ、さらに広くその子どもの世話と養育に責任を負うべき複数の養育者が共有する行為とされている¹⁾。コペアレンティングを進めることは、共働き夫婦が円満な関係を築くことになり、子どもの成長にも大いに良い影響を与える²⁾。我が国では1950年代までは、同居の祖父母が子どもの世話をしたり、お隣の家が一時的に子どもを預かったりしている。夫婦以外に子育てに協力できる人が身近にいた時代から、核家族化が進み子育ては基本的に夫婦だけで行う環境に変わった。子育ては夫婦で一緒に協力しなければうまく行かないと考えるが、男は仕事、女は家庭という役割分担で表面上うまく回って行き、いつのまにか子育ては母親の仕事という固定観念が出来上がっている。そうした状況において、我が国の子育て研究は、支援の評価や父親の養育行動など父母別々に検討するものが圧倒的に多い³⁾⁴⁾。あるいは父母の行動の差異や父母役割の調整行動の検討⁵⁾⁶⁾など、子育て生活における夫婦関係を扱うものもあるが⁷⁾、子どもに対する実際的なかわりの協働やその調整については報告されていない。

海外では、1995年頃より二人親家庭にコペアレンティングの概念が導入されて研究がすすめられており、母親が父親の育児関与を妨げる直接間接の原因となりうること、つまり性役割観が強い母親は、父親の育児関与が低いことが明らかにされている⁸⁾。研究者として子育て研究に取り組み、母親の育児ストレスや育児幸福感、育児への自信には、夫の関りが大きいことが明らかにされている。育児幸福感では生後3か月と1歳6か月、3歳で“子どもとの絆”は高いものの、“子育ての喜び”、“夫への感謝”が低下していた。育児ストレスでは“夫の支援のなさ”が高く“心身の疲労”が低下していた。“育児不安”には有意な変化はなかった⁹⁾。第一子の出産を機に、夫婦はそろって子育てのスタートラインについても、妻が認知する夫からのサポートは、子どもの成長とともに低下していることも明らかにされている¹⁰⁾⁻¹³⁾。加えて、夫婦の親密性も低下している¹⁴⁾。こうした状況を踏まえて、我が国では、夫婦が協働しながら子育てに向かうための介入モデルが期待されているが、夫婦の育児の協力については、まだ途に就いたところであり、これからの研究成果に期待されるところである。

2. 研究の目的

研究 1 本研究では父親の子育て関与を促進したり阻害したりする調整者としての母親の存在に注目し、夫婦ペアレンティング調整尺度を用いて関連要因を明らかにすることを目的とした。さらに母親自身が捉えた母親の夫婦ペアレンティングである促進行動と批判行動に着目した。特に育児幸福感や育児ストレスなどの心理的な特徴、加えて結婚の“現実”や自己志向的完全主義、子育ての話し合いや属性要因などの影響要因を明らかにすることを目的とした。また、夫婦の危機である産後クライシスを乗り越え、家族の再構築期にある夫婦のペアレンティングを有効に機能させることは、子育て支援を行う上で重要な視点と考える。そこで支援への第一歩として、夫婦の子育ての話し合いの状況、夫婦が相手から子育てを批判された時の気持ちや、批判の背景にある事柄の受け止めを明らかにすることを目的とした。

研究2 育児期にある夫婦関係の自覚と実際のなかかわりの協働やその調整である夫婦ペアレンティングへの思いを明らかにする。妻の促進行動や批判行動の背景にある思いやその思いに関係していると考えられる夫婦関係の自覚を明らかにする。

研究 3 夫婦が協力して子育てすることが夫婦関係や子どもの成長への有効性が明らかな中、夫婦ペアレンティング尺度の開発は十分とは言えず、夫婦ペアレンティング尺度開発を目的に研究に取り組んだ。

3. 研究の方法

研究1 幼稚園並びに子育て支援センターへ調査協力をお願い文と共に質問紙を同封し直接研究者が説明をして施設管理者に協力を依頼した。父母それぞれへの質問紙の依頼文には、回答後母親と夫の質問紙を別の封筒に入れて封をして園またはセンターに持参すること、調査の協力にあたり、調査に協力をしない場合や途中で辞退しても不利益がないこと、利益として子育てにおける自分の考えや思いを振り返る機会となることを明記した。調査用紙は施設責任者から対象者に配布され、回収は施設に設置された回収 BOX にいれ匿名性を担保した。調査は無記名で行ない、調査用紙の表紙の同意チェック欄にチェックされた場合研究への同意が得られたものとした。3 - 4 歳児の親 1062 人に無記名調査用紙を配布し、個別封筒にて回収された 499 人(有効回答率 47%)母親 291 人、父親 208 人に対する統計学的分析を行った。

研究2 2018 年 7 月に行われた X 県内の 3 歳から 4 歳の子どもをもつ母親と父親を対象に保育園、幼稚園、子育て支援センターを通じて行ったアンケート調査において、訪問による聞き取り

調査への協力の意志を確認するため、調査用紙の返送時に協力の意志のある方に連絡先(住所)の明記を依頼した。後日、その連絡先に調査の趣旨や方法について明記した資料を郵送し、返送により協力の意思と連絡先(電話)の明記を依頼した。その後、電話またはSNSで連絡を取り、訪問の具体的な日時や場所の調整をした。家庭訪問により半構造化面接を夫と妻と別に行った。相手の語りたい事柄を丁寧に聞き取った。面接対象者への許可を得てテープによる録音を行った。3歳から4歳の子どもをもつご夫婦で、調査協力の意志のある7組14名を分析の対象とした。

研究3 1次調査:研究2で聞き取った対象のうち、7組14名を除く11名とした。対象とした11名の属性は平均年齢40.5歳、子どもの数は平均2.6人、子どもの平均年齢第1子9歳、第2子5.5歳、6名の平均第3子4.5歳、第4子の1名が3歳だった。全員が核家族であり、フルタイム4名、パートタイム4名、専業主婦3名であった。2次調査:X県内に在住する4幼稚園、1子育て支援センターを通じて質問紙調査を行った。調査協力の同意は質問紙調査の表紙にある協力のチェック欄にチェックをお願いし、協力への同意を確認した。調査用紙は園に留め置き回収した。子育て支援センターは同封の封筒による返送により回収した。

4. 研究成果

研究1 促進行動と抑制行動の4パターンの比較において、促進高批判低で、母親では、‘夫への感謝(育児幸福感)’が高く、結婚の‘現実’である相思相愛、夫への理解・支援、妻への理解・支援が高かった。さらに子育ての話し合いで納得していた。促進低批判高では‘子育て不安(育児ストレス)’、‘夫の支援のなさ(育児ストレス)’が高かった。促進高批判高では子育ての話し合いを数えきれないほど行なわれていた。本結果から、促進高批判低では4パターンで最も良好な心理状態が示された。このパターンの母親は子育ての話し合いにより納得していた。この結果から母親の批判行動を抑え促進行動を強化するには、夫婦が良好な結婚観をもつことや子育ての話し合いで納得することへの働きかけの有用性が示唆された。母親の促進行動の影響要因は‘夫への感謝’‘夫の支援のなさ’‘話し合い(有)’であることがわかった。‘話し合い(有)’は促進高群となる傾向に最も影響しており、次いで‘夫への感謝’であった。‘夫の支援のなさ’は促進高群となることが減じるに影響していた。“完全でありたいという欲求”は批判高群となることに最も影響していた。“夫への感謝”“夫への理解・支援”は批判高群となることが減じるに影響していた。夫婦をペアとしてとらえ夫婦の子育てにおける夫婦間調整をうまく機能させるためには、夫への感謝や話し合いに支えられた夫婦の関係に満足できることの積み重ねに着目した夫婦への支援が示唆された。子育ての話し合いは8割が行われ、出産後が最も多かった。批判に対する妻の受け止めでは<夫からの批判をマイナスに受け止めている><夫からの批判をプラスに受け止めている>のカテゴリーがあった。妻が考える夫の批判の背景では、<互いの性格傾向による><夫との生育歴や親役割観の違い><夫婦関係の歪み>の力

テゴリーがあった。一方、批判に対する夫の受け止めでは<妻からの批判をマイナスに受け止めている><妻からの批判をプラスに受け止めている><妻からの批判を受けても関係ない>のカテゴリーがあった。夫が考える妻の批判の背景には、<互いの性格傾向による><妻との生育歴や育児観の違い><家庭内の役割や関係性>のカテゴリーがあった。夫婦の育児への批判をめぐって、その違いや特徴が明らかになった。良好な夫婦のペアレンティングの介入に向けて、妻と夫の受け止めや背景にあるものの違いを念頭において、夫婦の認識や受け止めのずれが大きくなる前に、お互いの思いを伝達すること、親役割観の見直し、育児観の尊重、不満な思いを伝え話し合うことが示唆された。

研究2 妻は、<子育ての中で感じる気持ちを大切にできる><成長している夫を感じる>などから【自分の子育てを支えているものがある】、<子どもとのかかわりは間違っていない><自分のおかれた環境を自覚している>から【子どもへのかかわりへの思い】をもって<夫へのささやかな不満がある><夫とのコミュニケーションへの意識がある>から【夫に対する客観的な分析】をしながら、<夫とうまくいっている実感がある><夫への感謝の気持ちがある><夫への理解と信頼がある>により【夫との協力関係への満足感】をもっていた。一方、夫は<夫婦の協力に対するスタンスがある><子どもに向き合っている>により【自分なりの妻や子どもへの考えがある】をもち、<妻との折り合いをつけている><妻と助け合うことはあたりまえ>などから【妻と助け合って子育てをするための努力】をしながら<妻への信頼と感謝がある><妻との関係に満足している>により【妻との協力関係への満足感】をもっていた。夫婦は互いの信頼関係や感謝の心、支え合いの中で、二人の関係への満足感をもっていた。妻を支えたいという夫の思いと、子どものために、妻に支えられている実感の中で、二人の関係は保たれ調整されていた。こうした夫婦関係を基盤にして、良好な夫婦ペアレンティングへの思いが保たれていた。

研究3 主因子法による因子分析の結果 29 項目 4 因子構造が明らかになった。第一因子は 10 項目で構成され“相手への思いやりと感謝”で $r = .92$ 、第二因子は 7 項目で構成され“助け合いたい気持ちと言動”で $r = .82$ 、第三因子は 5 項目より構成され“夫婦のコミュニケーション”で $r = .71$ 、第四因子は 7 項目より構成され“夫婦の協力を阻害するもの”で $r = .77$ と相応な結果が得られた。併存妥当性では、夫婦ペアレンティング調整尺度並びに結婚の“現実”尺度との有意な相関が認められ、内部整合性も因子間相関により確認された。属性では、“相手への思いやりと感謝”では、夫が妻に比べ有意に高く ($p < 0.05$)、“助け合いたい気持ちと言動”では、子どもは、3 人より 2 人の方が有意に高かった。また、“夫婦のコミュニケーション”では、仕事無が有意に高かった。“夫婦の協力を阻害するもの”では属性の関係はなかった。親発達意識では、妻の“相手への思いやりと感謝”と“助け合いたい気持ちと言動”“夫婦のコミュニケーション”は、夫の“リソース制約感”を除く全ての項目に高群に有意となった。“夫婦の協力を阻害するもの”では、妻の“関係性意識”、“リソースの制約感”のみ有意となった。29 項目 4 因子で構成された尺度開発により、夫婦ペアレンティング尺度としての活用が期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 清水嘉子	4. 巻 VOL61 No2
2. 論文標題 育児期にある夫婦ペアレンティング-母親の促進行動と批判行動への影響要因-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 母性衛生 採択	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 清水嘉子	4. 巻 VOL61 NO2
2. 論文標題 子育て期にある夫婦ペアレンティング調整パターンと関連要因	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 母性衛生	6. 最初と最後の頁 340-351
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 清水嘉子	4. 巻 VOL34 NO1
2. 論文標題 .育児期にある夫婦ペアレンティング-互いの育児の批判をめぐって-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本助産学会誌	6. 最初と最後の頁 103-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3418/jjam.JJAM-2019-0009	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 清水嘉子	4. 巻 VOL35 No2
2. 論文標題 育児期にある夫婦関係の自覚と夫婦ペアレンティングへの思い	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本助産学会誌	6. 最初と最後の頁 145-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3418/jjam.JJAM-2020-0027	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 清水嘉子・鈴木孝
2. 発表標題 育児期にある夫婦関係の自覚と夫婦ペアレンティングへの思い
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水嘉子
2. 発表標題 子育て期にある夫婦ペアレンティングー促進行動と批判行動に影響する要因ー
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水嘉子
2. 発表標題 夫婦ペアレンティング尺度開発
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水嘉子
2. 発表標題 Parenting together in the childcare stage in Japan: Adjustment patterns and influential factors
3. 学会等名 I C M大会（パリ）バーチャル（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

名古屋学芸大学 教員紹介
https://www.nuas.ac.jp/profile/staff/nursing/yoshiko_shimizu.html

科研費による研究の成果
<https://aru.nuas.ac.jp/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------